九死に一生を得て

三宅信雄
（[redacted]在住、当時一六歳　広島二km）

私の生い立ち

私は一九二九年広島の皆実町で生まれ、広島で育っていましたが、小学校三年生の時、広島逓信局（今の郵政局）に勤めていた父の転勤で、高知に転居、さらに五年生の時、東京に転勤のため上京しました。住まいは京王線の桜上水駅の近くで、上北沢小学校に転校しました。上北沢小学校は当時新設の学校で、私はその第一回卒業生になりました。中学は中野にある当時の東京高等学校尋常科（中高一貫の七年制の高校で、尋常科は中学部に相当、今は東京大学の付属中・高校になっています）にすすみましたが、段々戦況も厳しくなり、四年生の時は勤労動員で、日立製作所の亀有工場に行かされ、鋳物で〇型戦闘機（通称〇戦と言っていました）の脚を造っていました。

父は一九四七年、軍属としてスマトラ島の郵政局に赴き、東京には母と私より五歳年下で小学生の弟と三人で住んでいました。四五年になり、東京大空襲をはじめ度重なる空襲で、母は親戚が全くいない東京での生活が大変心細くなり、広島に帰りたいと言い出しました。私は尋常科四年を終了して高等科にすすんだばかりでしたので、東京に残るつもりでしたが、六月頃だったと思いますが、とにかく母と弟二人を送って行くつもりで、持てるだけの家財を抱えて三人で満員の汽車に乗り込み一昼夜かかって広島へ、取りあえず母方の祖母が住んでいた佐伯郡大野村（宮島口の一駅西の大野浦駅近く）に連れていきました。

ところが親戚の噂によると、米軍は名古屋あたりに上陸して、広島と東京は分断されるかも知れないから、東京に帰らない方がよいとのこと、急遽私も広島に留まることにしました。そこで知人に頼んで、広島高等学校（旧制の高校で今は広島大学の付属高校になっています）に転校の手続きをして転入学しました。といっても勤労動員で、広島駅の一駅東の向洋駅近くにある日本精鋼所広島工場の寮に住み込んで、一日中兵器製造の仕事をさせられ、夕方二時間ばかり、工場の集会室で授業を受けていたのを思い出します。

一九四五年八月六日

たまたま八月六日は、工場の電休日に当たっており休みでした。（電力不足のため、工場ごとに交替で休んでいました）そこで、腎臓炎を患って広島市内の平野町（広電本社裏の京橋川沿い）に住む姪の家で寝て

いた母を訪ねようと、朝早く寮を出て広島駅まで歩き、そこから市電に乗りました。この日も雲一つない真夏の太陽がぎらぎらと照りつけ、暑い朝でした。一度発令された空襲の警戒警報も解除され、多くの人が職場に向かうため街に出て、電車も満員でした。

目的地の電鉄前に行くには、紙屋町経由の宇品行きの電車がよいのですが、待っていてもなかなか来ません。丁度比治山経由の宇品行きが来ましたので、これに乗り、専売局前で乗り換えて御幸橋を渡り、電鉄前に着く直前のことでした。頭上に「ピカッ!」と真っ青なものすごい閃光、一瞬電車の電気がショートしたのではないかと思った私は、感電しては大変と、丁度後部入り口（ドアはありません）付近にいたのを幸いに停まる寸前の電車から飛び降りたのです。体が車外に出た瞬間「ドーン!」という大音響とともに真上から爆風で地面にたたきつけられました。しまった!爆弾の直撃にあった!と思いながら、意識もうろうのうちに、どのぐらい地面に倒れていたのでしょうか。やがて気がついて、薄目をあけてもまわりは一面の砂ぼこりで真っ暗、何も見えません。大分たってからようやくうっすら見えるようになって見ると、あたりの家は真下につぶされています。急いで母のいる親戚の家にかけつけました。丁度その時、近所の消防団の人でしょうか、半壊の家の中から母を引っ張り出しているところでした。その頃市の中心部から火の手が上がり、だんだんこちらに迫ってきます。倒れた家具で腰を打って歩けない母を背負うようにして道幅の広い電車通りに避難しました。

そこで見た光景は、驚くほど凄惨なものでした。火に追われてこちらを向かって歩いてくるおびただしい群衆。着ているものは焼け、体も焼けただれ、はがれた腕の皮膚が手首のところに引っかかって前にだらんと垂れ下がって、まるで幽霊か夢遊病者のように、「熱いよう!痛いよう!」と呻きながら、沢山の人がとぼとぼと歩いてきます。男も女も若い人も年寄りも区別できないさまです。それでもわずかに残った衣服の切れ端で下の方を押さえているのは、女の人でしょうか。喉の乾きに耐えられず、水を飲もうと防火用水に首を突っ込んで死んでいる人もいます。私は何が何だかわからないまま、一瞬のうちに地獄に連れ込まれたような思いになりました。

ここから約四〇〇m南の御幸橋のたもとで、軍がこれらの火傷の人に油を塗ってトラックの荷台にのせて、宇品港の方に運んでいました。火はだんだんこちらに近づいてくるので、一人で歩けない母は危険だと思い、母もこれに乗せてもらって去っていきました。

私は再び一人になりました。とにかく、耳や鼻など体のいたるところにつまっている砂ぼこりを洗おうと、近くの川に行きました。ゆっくり流れる太田川の水面には、幾つもの死体がぽかりぽかりと浮かびながら流れてきます。次々と迫ってくる火に追われ、あるいは火傷の痛さに耐えかねて川に入り、強烈な熱線と放射能をあびた体は、一口水を飲めば死んでしまうことも知らない人たちの最後の姿でした。しばらくすれば海に出て、もはや遺体を探すすべもない人たちの。

こうして一人になった私は、その後どこを、どううろついていたのか、どうしても思い出せないのです。再び記憶がよみがえるのは、夕闇せまる頃、比治山の下を広島駅の方に向かってとぼとぼと歩いている自分。左手の京橋川の向こうは見渡すかぎり焼き尽くされ、燃え残りがあちこちに赤い炎をあげています。遠くの山やまも見渡せ、今朝までの広島の町とは全く違う死の世界を見ながら。川には潮の満ち干にあわせてたくさんの死体が川を上ったり、下ったりしています。

ようやくたどり着いた広島駅の焼け跡のコンクリートに、「敵は今朝八時一五分、広島に新型爆弾を投下せり」という手書きの張り紙があったのが、妙に印象に残っています。これが世界最初に人類の上に投下された原子爆弾とは、その時の私に知るよしもありません。

まもなく、二駅西の己斐駅（今の西広島駅）から下り列車が出るという噂を聞き、私は汽車の線路の上を再び歩きはじめました。線路は広島市の北側を迂回する形で西に向かっていますので、市の中心部は通っていませんが、いくつもある鉄橋を暗い中をよく渡ったものだと、あとで考えてぞっとします。己斐から汽車に乗って、深夜何時頃か覚えていませんが、祖母のいる大野村にたどり着きました。こうして、再びあってはならない一大惨事を目のあたりにした長い、長い私の一日が終わりました。

なお、母は宇品から多くの被災者とともに似島におくられましたが、多くの者が火傷で皮膚のはがれた体にうじがわいて苦しみ、うめきながら次つぎと亡くなっていくさまが気の毒でたまらなかった、と言っていました。母は幸い屋内にいたため火傷がなく、一週間か一〇日後に送り返されてきて、大野村の母のところに帰りました。また弟はまだ小学生でしたので、大野村の小学校に通っていて難をのがれました。

私は、その後原因不明の下痢が何日か続いたり、電車を飛び降りた時に足を切ったところが、膿んで半年ぐらい直らなかったなどの多少の後遺症はありましたが、多くの被爆者がその後かかった激しい後遺症にな

やまされることもなく、元気を回復できたのは全く不思議な思いがします。

これは考えてみると、いくつもの偶然が重なって助かったのです。先ずさきに述べましたように、町の中心部を通る紙屋町経由の電車に乗らなかったこと、次にピカ！ときたとき、丁度爆心に向かって走っていた電車の最後部で、背の低い私は満員の人の中に埋もれていて、熱線の直射を受けなかったこと、またドーン！と爆風がきたときは電車の外に飛び出していて、爆風で飛び散った電車のガラスの破片を受けなかったこと、また市の南西部をうろついていて、放射能を一杯含んだいわゆる「黒い雨」にもあわなかったこと、さらに肉親で行方不明の者がいなかったので、その後探しに。市内に入らなかったこと、などいくつもの原因が考えられますが、この中のどれか一つでもはずれていれば今日の私はなかったと思うのです。あの時死んでも、火傷しても、あるいは放射能の後遺症にかかっても決して不思議ではない状態から奇跡的に助かったのです。

戦後の暮らし

戦後学校もしばらく休校になっていましたので、大野村の農家の二階の一室を借りて母、弟と三人で仮住まいしていました。その後、例の九月一七日の台風で、祖母の家が流されて祖母が亡くなるという事件もありました。いつまでもその農家にもおられず、住むところをあちこち探していましたが、たまたま山口県岩国駅の西、歩いて一時間ぐらいのところ、（今は近くに南岩国という駅ができていますが、当時はありませんでした）に元兵舎を使った市営住宅があるということを聞いて、早速そこに移り住みました。　秋に広高も大竹の潜水学校のあとを借りて授業を再開するというので、ここから通っていました。弟も、翌四六年四月に広島一中に入学して、家から藤生駅（岩国の一つ先の駅）まで四〇分歩き、汽車に一時間乗って己斐まで行き、さらに当時江波にあった学校まで三〇分歩くという大変な通学をしていました。そうこうする中に、四六年夏か秋かはっきり覚えていませんが、戦後現地で捕虜になっていた父が復員してきました。そしてお互いの無事を喜びながら、久しぶりに一家四人の生活が始まりました。

年があけて四七年四月、広高は皆実町の校舎が復旧されてここに戻ることになりました。兄弟二人、広島へ通学というのはあまりにも大変なので、観音町のある方の家の一室を借りて一家は広島に戻ってきました。

戦後の食料難と経済的苦しさの中で、親戚の者から、働かないでいつまで勉強ばかりしているのか、という

ようないやみを言われたのもこの頃です。しかし何とかして大学に進学したく、家主の倉庫の中でこっそり受験勉強したのを覚えています。

早く悪夢の広島から離れたく、三年前まで住んでいた東京に戻ろうと、東京の大学を受験、幸い合格しましたので、四八年四月単身上京、大学近くの西片町にあるキリスト教関係の寮に入って久しぶりに東京の生活に戻りました。もちろん仕送りなどなく、奨学金とアルバイトで大学三年間を過ごしました。四八年秋、父も退官後今の[redacted]に小さな家を買って、母、弟ともに東京に移ってきました。

私は一九五一年に卒業し、東京の会社に就職しました。五四年に結婚しましたが、その前にそっと病院に行って白血球の検査をしてもらい、異常ないことは確かめましたが、被爆したことを話さないまま結婚したことを後年妻に指摘されたこを思いおこします。以来ずっと東京の生活をして今にいたっています。そして私にとって大変苦しい、いやーな思い出としか残っていない広島のことは忘れようと、その後広島には全く行きませんでした。そして専ら企業戦士として、仕事に専念してきました。

被爆者運動に参加して

このような私の生活に変化が現れたのは、今から二〇年程前のことです。世田谷同友会の[redacted]をしておられた[redacted]さんが、晩年の母を時どき見舞って下さいました。また、妻も八二年夏の「原爆を裁く世田谷・烏山国民法廷」などのお手伝いをしていました。そのうちに私にも声がかかり、まだ現役中で会社が忙しい時でしたが、たまに同友会の集まりにも出ていました。そのうちに、東友会にも出ないかと言われましたが、幸い会社が日比谷で、東友会の事務所と非常に近いところにありましたので、会社を終えて夜の東友会の常任理事会には出られるだろうと思い、お引き受けしました。一九八三年のことです。

さて、東友会に出るようになってから、被爆に対する私の思いが大きく変わりました。一つは、自分は味わわなかった多くの被爆者の戦後の苦しみです。被爆にともなう病気と暮らしの苦しみ、また肉親を失ったことの心の苦しみ、戦後一〇年余も放置され、また世間からもろもろの差別を受けてきたことなど、たくさんの方からこれまでの被爆者の歩みを聞き、学んだことでした。

もう一つは、一九五六年以来全国各地の被爆者が結集して政府に対して被爆者援護の要求を突きつけて運動を始め、それは当時もますます激しくつづけられて

いたことです。その結果、原爆二法がつくられ、また各自治体で被爆者援護の条例がつられていった歴史を学んだことでした。特に初期には、みんな貧しく、仕事に忙しい中にも大変な苦労を重ねて運動に参加しておられた様子をうかがい知りました。

さらに、被爆者救援活動だけでなく、「ふたたび被爆者をつくらないための核兵器廃絶運動」も平行して行なっておられることにも大きな感銘を受けました。

また、東友会に出入り始めて間もない一九八五年八月に、遺族代表の墓参団として広島に派遣されて久しぶりに広島の地を踏み、平和記念式典に参列し、原爆資料館を見学したことは、私の頭を広島に引き戻す大きな役目を果たしました。

このような学びの中で、これまで自分が何も知らず、何もしてこなかったことを深く反省しました。そして今苦しんでいる人びとに少しでもお役に立つことをしたり、あの悲惨な実相を後世の人びとに伝えるために、神様が私を生き残されたのだと悟って、当時はまだ仕事の方が現役で多くの時間はとれませんでしたが、できるだけこの運動に参加するようになりました。

また、世田谷同友会でも、ご高齢になられてご病気がちな[redacted]を助けてお手伝いするようになりました。

今思うこと

広島・長崎のあの惨事は再び繰りかえされてはならないとの私たちの願いと裏腹に、その後世界中で核兵器の開発が進み、二千回以上の核実験が行われ、その被害者は三五〇万人にもおよぶと言われています。そして現在も世界中に三万発もの核兵器があり、戦争、紛争の絶えない世界情勢の中で、いつこれが使われるか分からない危険な状態になっています。

さらに圧倒的な核廃絶の世界世論を抗して、今もアメリカは新しい核兵器の開発に余念がないことは、本当に憂うべきことです。日本も唯一の被爆国と言いながらこれに追従して本気で核廃絶に取り組んでいないことは、まことに憂慮すべき状態です。

広島・長崎の惨事から五八年が過ぎました。広島・長崎のことが風化した時に、再び核戦争が始まるといわれます。私たちはみな老齢化しました。しかし五八年前のあの日のことを風化させないために、戦争を知らない人たちに語り伝えていかなければならないと、折りあるごとに被爆の実相を語っているこの頃です。

（２００３年９月１８日　記）

No.

平成26年4月12日に非核兵器国の「核軍縮・不拡散イニシアチブ」外相会合を広島の地で行ない、各国代表を広島平和都市記念碑(原爆死没者慰霊碑)にお参りをしておきながら、日本の外相は、核兵器禁止条約締結を求めるのではなく「実質的かつ段階的なアプローチ」という従来の主張のまゝの「広島宣言」では、慰霊碑に刻まれている「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」はいったい何なのか、と問いたい。

お知えてください。

平成26年5月6日

村上秀雄

茨城　茂木貞夫

① 高令化が急速に進み語り部等が困難になりつゝある
② 被爆体験者当時のことを話したくないとのこと
③ 戦時中の状況を鮮明に話すことができない二世、三世が多い

④ 水戸では戦争の体験者語りをする
⑤ 県生協、被爆者、茨大生らの紙芝居の制作に取組んでいる
⑥ 被爆者と各種団体との語りをする　その他

「被爆体験談や平和への思い」

広島市[redacted]

八　木　義　彦

1,945年8月6日家族との朝食後。その日は夏休み中の登校日(月)だった。白島国民学校(爆心地より1.5km)五年生11歳の悲劇は登校直後に襲いかかったのだ。
木造二階建ての校舎で五年生の教室は二階にあった。当時は学童疎開で在校生は一学年で1クラスくらいが残留していたと思う。
8時15分その瞬間私は二階の教室に手荷物を置き、運動場に出ようとした時だった。
強烈な閃光が走り目の前が真っ暗になった。そのまま気を失い時間の経過は憶えていない。体中に重くのしかかる痛みで正気に戻ったが、薄暗い所に押し込まれ体の自由が利かない。
木造の校舎は完全に倒壊して瓦礫の下敷きになっていたのだ。力一杯体をよじりながら瓦礫の間を抜けて、明かりに向かい崩れた屋根の上に出られた。
二階建ての校舎は平屋のように低く潰れ、校舎からは火の手が勢いよく上がっている。校庭で遊んでいた生徒は真っ黒に焼けただれ潰れた校舎の隅に吹き飛ばされていた。
潰れた校舎からは助けを呼ぶ声も聞こえだが、燃え盛る火勢が強く11歳の子どもに助けることはできず。私は爆心地から1.3KMの西白島町の我が家に向かう。
途中の道は瓦礫に埋まり崩れた民家からも火が出ている。夏の薄い衣服が焦げて火傷で皮膚が垂れ下がった人達が倒れ逃げまどっていた。何が起きたのか子どもの私には理解できなかった。
無我夢中で家までたどり着いたが、近所一帯も崩れ落ちて火災が起きていた。家族が居たはずの家に向って親や兄弟の名を何度も何度も呼び続けたが、応えの声もなにも聞こえてこなかった。
次第に火勢は強くなったがそこから離れられず、声を限りに呼び折る思いで応えを待つ。その時私の手を強く引っ張って、早く逃げんと焼け死ぬぞと怒鳴られ炎に追われてその場を離れる。
一人で逃げる後ろめたさから、火に包まれる我が家を何度振り返っただろう。市の中心部から火傷をした皮膚を、全身から垂らした被災者が北に向って逃げる。私も人波に押されて北に向かい桜土手の長寿園に来た。
真夏の暑さに火傷を負い水を求めて川土手に引き寄せられた。ここまで来て力尽き水を求めながら息を引き取る人。川に入ってそのまま流れに身を奪われる人。
被災者は救援の手が何も届かない中で、人間の尊厳を奪われ次々と孤独な骸を野に曝したのだ。
子供の想像力をはるかに超えた現状を目にした記憶は今も脳裏に生きている。
その日の内に私は母の里、芸備線の中三田に避難して家族との再会を待つ、翌七日は終日待ち続けたが果たせず、8日朝早く家族を探しに市内に出た。
列車は広島駅には着けず途中で下車して神田橋を渡り白島に入る。橋の上から見た川面には累々と水死体が浮かんでいた。救援の筏や小船が出て手鉤棒で遺体を引き寄せ土手に収容している。
市内は完全に焼失し瓦礫と化し、未だくすぶり続ける焼け残りや破れた水道から水が溢れていた。
白島国民学校の校門前で見たのは、焼け落ちた校舎の瓦礫や未だ収容されない小さな骸が、折り重なって校庭の隅に残されている。
被爆から二日目で市街地の被災の跡は生々しく、焼け焦げた遺体は数知れず無残な形で目に焼き付く。
正常な感覚は麻痺して怖さを感じない、異様な神経の高ぶりがあったのだと思う。
西白島の我が家の一帯も焼け野原だった。瓦礫だけが残った焼け跡に呆然と立ち尽くすだけだった。
8人家族の内一人の消息も分らないまま、蒸し暑さと異臭の市内を当てもなく歩き回り、疲れ果てて長寿園の土手に付いたのは日暮れに近かった。
その夜は大勢の被災者と野宿。ゴザやムシロの上に横になり、火を燃やし煙で蚊を防いでいる。
近くの土手や対岸の大芝では夜を徹して荼毘の炎が、鬼火のようにゆらいでいた。
十分な手当てもなく苦しいうめき声が絶えず聞こえ、朝になるともう動かない骸となって荼毘の場所に移される。名も知れず生きた証さえも消されて無縁仏となってしまうのだ。
九日も一日中途方にくれて捜し歩いたが、何の成果もなく祖母のもとへ帰り寂しい報告をした。

被爆から5日目に妹の([redacted]8歳)と、同居していた父親の末弟(叔父の[redacted]34歳)の二人が相次いで、避難してきた。妹は軽い火傷でほどなく治癒したが、叔父は右顔面から首、肩から腕に深い火傷で引きつったケロイドは残った。
その後も何度となく市内を捜し求めたが、5人の消息は掴めないまま月日は過ぎ去り、重傷だった叔父は三年後に多臓器不全で亡くなった。
放射能に汚染されたな灼熱の火柱と、巨大な原子雲の下で何の罪も無い市民が、無差別に殺戮され、かろうじて生き残った高齢者は今もなお放射能の恐怖に曝されている。
あきらめ切れずにだが、20年の10月22日、父[redacted]、姉[redacted]、姉[redacted]、姉[redacted]、弟[redacted]、家族5人の被爆死を市役所に届けた。その後市役所が出す原爆供養塔の納骨名簿を何年も閲覧したが、5人の名前が載ることはなかった。
12月末までに亡くなった市民は約14万人、原爆供養塔に納骨された身元不明者は7万柱と記されている。私は平和公園を訪れる度に先ず供養塔に向い、ここに眠っているだろう家族五人に手を合わせ霊を慰めている。
1.995年8月の盆を機に被爆死した家族5人の名前を納骨のない墓石に刻み、妹家族と五十回忌を営んで気持ちの区切りにした。

退職の数年後、新聞の投稿で被爆体験が掲載され、被爆した白島小学校の教諭からの連絡で児童に被爆体験を話したのがきっかけで、その後依頼があれば今も出向いて話をしている。
2.008年の第63回の地球一周ピースボートに乗船して20カ国を訪問し、ベトナム、ベネゼーラ、ペルー、オーストラリアで、当地の平和団体に被爆体験や核兵器廃を訴え、平和活動への分科会などにも参加させてもらった。

広島市と長崎市が1.982年に「ヒロシマ・ナガサキ議定書」(核のない世界を2.020年までに実現させる)との規定に賛同して、2.009年3月ピースボートに乗船した数人と共に、「Yes!キャンペーン」(ボランティア組織に参加した。
この議定書に基づいて二つの行動を起こした。一つは難解な文書を絵本風に解説して誰にでも理解でき、親しめる本を作って学校や、図書館に普及させ議定書の周知と推進を図る。
本は60ページでカバーと表紙は建築家の「安藤忠雄」氏。イラストは「黒田征太郎」氏、英訳は「畝崎雅子」氏の協力で完成し、18.000部を印刷その販売利益他有志の寄付金が活動資金になった。
我々ボート仲間は、全国の市町村を訪問して首長に「ヒロシマ・ナガサキ議定書」の趣旨に賛同署名を得る活動をする事を決めた。
この行動には当時ヒロシマ平和文化センター理事長の「スティーブン・リーパー」氏の援助とYMCAや全国ネットの生協・その他各地の平和団体の援助も頂いた。
署名集めの行動は2.009年10月~5ヶ月間で、北海道から沖縄までの35都道府県をキャラバンして863市町村を訪問。533の賛同署名を集め当時の秋葉忠利市長に届け、役目を終えた「Yes!キャンペーン」は4月に解散した。

2.010年4月末、広島共立病院からの派遣員として、NY・NPT核不拡散条約再検討会議の平和行動に参加。各国の国連代表部を訪問ヒロシマからの核兵器廃絶をアピール。各地から集まった平和団体との交流や、街頭や公園に立って署名活動。
国連本部のロビーで行われた被爆者歓迎のセレモニーにも招待され有意義な5日間を過ごした。

被爆後69年を経て尚放射能の後遺症に苦しみながらも、高齢化した被爆者は余命に鞭打ちながら、核兵器の廃絶を懸命に訴え続けている。核兵器が地球上に存在することが、全ての生物に対する背信であり罪悪となる。
核保有国はその保有自体を国の恥として、今すぐ全廃へ一歩踏み出しても決して遅くはない。

私は入市被爆者です。戦雲暗い昭和二十年七月末朝鮮憲兵隊司令部付を命ぜられて富山県伏木港で船の入港を待っていたが入港なし。八月十一日突如原爆投下で全滅した中国憲兵隊司令部両建要員に指名され広島行きを命令された。当時交通事情が悪くて広島駅に到着したのは終戦日八月十五日の真夜中でした。プラットホームには屋根は無くホームも板張りで補修されていた駅舎は無くて残った壁が散見された。私は東京横浜の空爆後の警備に度々出動して来たが広島の惨状は予想外で実に無惨な惨状に驚いた。真夜中なので人影は無く司令部の所在を聞く人もなくて仕方なく市電の線路沿いに進んで広島城跡の管区司令部でやっと司令部の所在を知ることができた。到着した中国憲兵隊司令部は横川の夜野家墓地内にありテント張りで全く悲惨なものだった。翌日から広島駅周辺の警備に当った。見渡す限りの焼野が原が続いて五日市辺りまで見通せた。十一月一日復員命令が出て三か月勤務した広島を離れた。

いま憲法の改正集団的自衛権の行使容認で議論されているが戦争は絶対に駄目です。私の信念は二度と被爆者辛酸の母を作らないことです。

原爆の日が近づくにつれ、一歩かされている。自分に胸が熱くなる。被爆当時の傷状は、出前の母から幾度となく聞かされ、終生忘れられません。母と出後1ヶ月の私は、爆心地から1・5キロ、旧上柳町（現広島市中区上幟町）で原子被爆した。爆風で倒壊

[redacted]

は崩壊、私は大きな梁の下敷きになり、背中に至すくまが刺さり血まみれで身動きできず、母の子ではどうすることもできない。近づく人達に近所の人たちは阿鼻叫喚、母はあらん限りの声で助けを求めた。しかし、誰もが自分のことで精いっぱいで、命乞いの声など耳にへらない。ぼくが、幸いにも町内の人の手で一命を取り留めた。あれから69年。恩人に会い、お礼を申さねば、といつも心に思っているが、残念ながら消息不明のまま。原爆の日は犠牲者のご冥福と、恩人への深い感謝を込めて、心静かに合掌します。

せ田市市

吉村昭 69才

私は学徒動員で廣島市倉敷紡績株式會社へ動員したのです。
8月6日今日も同じ様に朝6時に起床し工場に行きました。工場で
朝食を済まして職場に行ったのがもう7時半頃でした。
すぐ作業服に着換へ仕上げの道具を準備した時警戒警報
と空襲警報が同時に發報しました。だがまもなく警戒警報
と空襲警報が共に解除の發報がしました。だが作業道具
を出した後、突然大きな爆音がしてイナビカリの様な光りがピカットした
強い光線がしました。すぐに壁のガラス窓がバリバリとこはれ
私が頭を上げて時時計は8時過ぎでした。だが私はすぐに
仕上げのバイス台の下へもぐり込みました。屋根が破壊したので
バイス台の足が折れ私は下におさえだれた それで足にケガを受けて
出る事が出来なかった 私は助けて下さいと叫びました。すぐに工場
の同事が来て助けて呉れました。足をケガしたので歩く事が出来なく
同事の背中に乗って工場の附近にある疎行場へ行きました。
工場も破壊され廣島市内の建物も皆破壊し、平地に成りました。
いたる所に煙りが出て其の後廣島市内は火で真赤に成りました 大海に成りました
市内からは序々に爆弾の光線を受けた人々が疎行場に向けて来ました
髪毛は皆焼かれ顔や手やらは水ぶくれでした。強い熱度を受けた者
翌日からは一人一人と死んで行きました。
當時の恐ろしい状況は一生忘れる事が出来ません いつも目の前に浮んで
きます。故に戦争は残酷なのです 幸福の家庭も破壊するのです
故に戦争を廃止し核武器も廃止して平和な社會に成り幸福な生活
を後代に継ぎ平和を希望します

2014年5月22日 [redacted]

「被爆体験談や平和への思い」応募用紙

記入日 平成26年（2014年）[redacted]月[redacted]日

ふりがな これだけより 氏　名 梁竹頼子 ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	生年月日・年齢 [redacted]
現住所・連絡先 〒[redacted]	
電話 [redacted]	FAX [redacted]

（聞き取り代筆した方の連絡先）

ふりがな 氏　名 ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	電話（　　）　　―
	FAX（　　）　　―

※　上記に記載された個人情報の取り扱いについては、広島市個人情報保護条例に基づき、平和宣言の作成、被爆の実相を伝える資料としての活用及びこれに付随する事務連絡のみに使用し、御本人の同意なく第三者に提供しません。

（被爆当時の状況）

当時の年齢	18 歳	性 別	男 ・ 女
当時の職業・学年等（できれば具体的な勤務先・学校名等も御記入下さい。） 陸軍病院 本院　看護婦			

※　被爆当時の状況については、平和宣言に盛り込む際や被爆の実相を伝える資料として活用する際等に、公開します。
※　この応募用紙に、被爆体験談（様式不問）を添付してください。
※　提出された書類は返却いたしません。

癒えぬ（云えぬ）傷

広島
長崎
藤田　浩

昭和二十年七月四日に生れて三十四日目、広島市白島で被爆、私は乳飲み子で窓越しに寝ていて頭と右手に光線を浴び大火傷を負い、九死に一生を得ました。次兄も三才で全壊の家の下敷きで頭を負傷し、私は現在も頭の傷跡がはっきりと残っています。姉は十六才で広島女学院在学中、国家総動員体制の中で学徒動員させられ、動員先で爆死、写真でしか会った事のない姉、肉親をバラバラにした原爆、私の頭は何年間かは頭皮が剥げ変わり、入学する頃は髪を伸ばし、禿を隠していました。帽子を肌身離さず被り、気に病んでいたようです。幼い子供心を傷つけた戦争、十六才で花も咲かずに散っていった姉。悩み苦しんだ青春時代、三十五才で結婚、三年前に全国戦没者追悼式に福岡県原爆死没者遺族代表として参列する機会を与えられ、生きる事の大切さ、苦しみ、生きぬいている人の事など、深く考えさせられ、心を新たにしました。今まで長く伸ばしていた髪をバッサリ切って丸見えの禿頭になりました。まだ子供達も小さく、「ハゲ」、「お父さんは学校に来んで」、「一緒に歩きとうなか」、「かつらにせんネ」とか言います。髪にする事は簡単です。頭を見ると自分で「ぞっ」とする事さえあります。心のどこかに恥ずかしい思いもあります。今、再び核の脅威にさらされている現実を直視し、広島・長崎の犠牲の上に立って核兵器の使用を断じて許す事はできません。自分の心と体を傷つけた原爆を身をもって体験した生き証人として原爆の地獄を後世に伝え、核廃絶の国際世論を大きく高めていく事が我々の責務と思います。未来に向って生きていく子供達のために「平和の鐘」を打ち続けていかなければなりません。

十六才で亡くなった姉の死を無駄にしないためにも!!

証言

癒えぬ傷

藤田浩

昭和二十年七月四日、広島市白島東中町[redacted]（当時）で生を受ける。

生まれてわずか三十四日目、世界最初の原爆が、八月六日午前八時十五分、広島に投下されました。

その日は、暑い暑い夏がはじまる朝でした。

市街主要部は、一瞬に廃墟と化し、爆心地の相生橋を中心に、半径二キロメートル圏内の木造建築は全滅、鉄筋建築は、残骸となり、死者は二十万人に達しました。

私の家も、爆心地から一・五～二キロメートルの所にあり、家は壊滅状態であったようです。

当日本の傷がついたのは藤田さんのえる癒

わが家は、どのような情況にあったのだろう。

その日私は、生まれたばかりの乳のみ子で、窓越しに寝ていて、あの原爆の光線を頭と右手に浴びた。

頭皮がツルリとむけ、右手にやけど（ケロイド）を負った。父はどこにいたのか、少しばかりのやけどで難をのがれた。長男（当時十一才）は、広島県と島根県の境に学童疎開していて無事だった。次男（当時三才）は、ヨチヨチ歩きの頃で、爆風で家の下敷になり、幸い命はとりとめたものの、柱か三本頭（額）に打ちあたり重傷（いまでも傷は残っている）、姉は、広島女学院の一年生（当時十三才）で、国民総動員の中で、当時の国鉄広島鉄道管理局へ学徒動員させられ、動員先で爆死。

写真でしか会ったことのない姉。十三才で青春もなく命を落とした姉。

肉親をバラバラにした原爆投下、それは筆舌に尽しがたい状況です。

傷を負った者が、やけどから水ほしさに川に飛び込み、川は人であふれていたといわれます。

それからわずか三日後の八月九日十一時十分、長崎に二番目の原爆が投下され、十五万人の死者と、街の三分の一を失いました。

父は、被爆してから、空気の澄んだ所で暮らそうと、父の郷里である熊本へ移り住んだ。私の青春（雲った青春）は、そこからはじまりました。

入学する頃には、髪もはえはじめ、女の子のように髪を長くしており、学生帽を肌身はなさず、食事の時も着帽のままで、よく叱られたことをおぼえています。

「将来は、帽子をかぶる仕事がいい。駅員さんがいいな」ともらしていたそうです。

幼い子供心までも傷つけた原爆。あれから四十八年、当時のことは、忘れられたかのようです。

私は、いろいろ悩み、苦しみ、考えました。「このままでいいのか」と。

昨年は、八月六日の慰霊祭に出席し、生まれたあたりも歩いてみた。八月十五日の全国戦没者追悼式にも福岡県代表として参列し、考えをあらたにしました。

そういう思いの中、昨年の八月三十日、髪をバッサリ落としました。

初めて見た私の頭に、知人の誰もが驚きをかくしません。私の子供たちですらそんな私の行動を理解するには時間がかかりそうです。

しかし、私は身をもって原爆を体験した生き証人として、そして、戦争のことすら忘れ去られようとしている現実の中で、親・兄弟を戦争でなくし、精一杯生きている多数の人たちのためにも、過去を過去とせず子供たちに「平和」の尊さを伝える使命感があると思うのです。

私を見てください。原爆の恐さを、戦争のおろかさを感じてください。

原爆の後遺症で苦しみ、亡くなっていく人があとをたちません。

私たちの戦争は、まだ終ってはいないのです。

被爆者援護法の早期制定を。

許すまじ原爆。広島、長崎から平和の鐘を。

像は訴える決して目をそらすなと

裕子に憶う

靖國の社に
魂は鎮まるも
夜な夜なかえれ
母の夢路に

昭和二十二年

齋

略歴

私は被爆者で86才です。来年のことはわからないので頑張ります。戦後、医師から、被爆者、活動すれば小頭症が生まれる、生んだ親も子供も苦、知識もないので一生苦労する。親にもこわいず知らせずでした。

父は憲兵で八月六日朝から十月初めまで広島城跡で兵隊と知識、看護に当たり十月後半に除隊して実家の近くに夜中に帰って、軍服、刀等、寝り明に焼きました。

本人も家族も少しばかり幸福でした。

その後、父の頭から皮膚や髪が抜け初めて、家中掃除に追われました。夏も近く、長袖、食も細り腰が曲がりだし体中悪くなり恐怖に、本人、家族も苦悩はわからず。私は広島中の病院を父と歩きました。何処も、薬もなり状態で、本人の悲惨さに泣きました。父を思うと、今でも、思い出で胸がこわれそうです。

母は、実家の長男家族をさがして市中歩き廻り、あつさで、水道の
ジャウ水をのみながら、市中、捜してまわり、死体の金覚め乎てで
一日中あちこち歩き、被爆者になりました、家のうに、顔が
白理になり、父さい、悲しみつづけて、女ですから顔を
大事に思って、他に自殺未遂、おこして、私は、悲しく
ども、弟母が(百才近)いるので、自分でふまいおこし、苦労しました。
両親の事、考えば、私は、狂沒きします。

草々

広島市 [redacted]

春アマサエ

五月二十六日 深夜

名称：平和宣言（平成 26 年）の作成に際し寄せられた
「被爆体験談や平和への思い」集
発行：広島市市民局国際平和推進部平和推進課
〒730-0811
広島市中区中島町 1 番 5 号
TEL 082-242-7831
FAX 082-242-7452
Email peace@city.hiroshima.lg.jp